

397 小型CsI検出器による頭頸部腫瘍の検索
 日下部きよ子、金谷和子、金谷信一、小林秀樹、
 太田淑子、牧正子、丹下正一、重田帝子（東女医大 放）、
 牧野元治（慈大 放）

汎用プローブとして開発された小型CsI検出器を用い、
 頭頸部腫瘍を有して $^{67}\text{Ga-citrate}$ が投与された症例を
 対象に、腫瘍検出用プローブとしての有用性を評価した。

フォトダイオードに接着された $14 \times 14 \times 10$ [mm]
 のCsIを鉛の単孔型コリメータで覆い増幅器に接続した。
 340 [g]の重量を有する。 $^{67}\text{Ga-citrate}$ 、 111
 [MBq]投与後3日で頸部の各部所の放射能は、10秒間で
 $100 \sim 1000$ カウントとなった。

小型CsI検出器は頸部の腫瘍性病変の検出および位置
 確認に有用であることが示唆された。

398 I-123 IMP SPECT による UVEAL MELANOMA
 の描出 宇野公一（千大 放）油井信春、木下富士美
 戸川貴史（千葉ガン 核）箕田健生、佐野秀一（帝大
 市原 眼）川名正直（帝大市原 放）

今回、我々は3検出器型ガンマカメラを用いたSPE
 CT像により、I-123 IMPのUVEAL MELANOMAの描出につ
 いて検討した。対象は脈絡膜悪性黒色腫4例、毛様体
 悪性黒色腫1例で、計6回の検査を施行した。装置は
 3検出器型ガンマカメラ（東芝GCA9300A）を使用し、
 I-123 IMPを 111MBq 静注直後に全身像、1, 3, 24時間
 でSPECT像を撮像した。5例中3例（4検査）において
 静注後1時間より腫瘍は描出され、24時間で最も鮮明
 な画像が得られた。本法は他の画像診断法と共にU
 VEAL MELANOMAの診断及び治療経過観察に有効であると
 われた。

399 ^{123}I -IMPによる肝細胞癌転移巣の検出能
 の検討
 岩宮孝司、谷川昇、周藤裕治、水川婦一郎、遠藤健一、
 西尾剛、太田吉雄（鳥取大学放射線科）
 謝花正信（松江市立病院放射線科）

^{123}I -IMPの肝細胞癌原発巣及び骨転移巣に対する
 集積に関しては、以前報告しているが、今回骨転移のほ
 か肺転移、脳転移、副腎転移、リンパ節転移症例に ^{123}I
 -IMPシンチグラフィを施行し、その検出能に関し
 て検討を行った。方法は ^{123}I -IMP 111MBq 静注3時間
 後に大視野カメラにてスポット撮影を行った。骨転移巣
 に関しては、高頻度で転移巣への集積を認めたが、肺転
 移・副腎転移症例では検出率は低下した。脳転移例では
 転移巣に一致して高集積を認めた。肝細胞癌転移巣への
 ^{123}I -IMPの集積にはRIの腫瘍特異性の他に臓器
 親和性の関与が示唆された。

400 ^{123}I -IMPの集積した肺癌症例の検討
 米倉隆治、牧野正興（国立南九州中央 放）中別府良昭、
 中条政敬（鹿大 放）

^{123}I -IMPは肺炎、無気肺には集積を認めるものの、肺
 癌には集積しないため、それらの鑑別に有用とされてき
 きた。今回我々は昭和63年6月～平成4年4月の間 肺癌症
 例60例に ^{123}I -IMPシンチグラフィを行なったが、4例に
 おいて肺癌病巣部に集積増加がみられた。そのため肺癌
 の鑑別における ^{123}I -IMPシンチグラフィの意義について
 再検討を行ない報告する。